広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	キリシタン版『落葉集』定訓の常用性について ： 同訓異表記を中心として
Author(s)	白井，純；陳，朝陽
Citation	表現技術研究 ， 19 ： 13 - 28
Issue Date	2024-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/55150
URL	https://doi.org/10.15027/55150
Right	
Relation	

キリシタン版『落葉集』定訓の常用性について
―同訓異表記を中心として―

白井　純・陳　朝陽

1. はじめに

本稿は、キリシタン版の漢字辞書『落葉集』（1598年刊）に掲載された和訓の常用性について、同じキリシタン版の文学書『太平記抜書』（1612～13刊？）の漢字表記と比較したものである。

『落葉集』はいろは部立てで漢語を掲載する「本篇」、いろは部立てで和訓に対応する漢字表記（単漢字部門・熟字訓部門）を掲載する「色葉字集」、部首立てで単漢字を掲載する「小玉篇」の三部から構成され、各部が和訓を鍵として緻密に連携するよう設計されている。このような連携は当代の日本側の古辞書には珍しいもので、掲載漢字の多くが三部で共有され、すべての部でほとんどの漢字が左右に傍音訓を持ち、「色葉字集」単漢字部門と「小玉篇」では個々の漢字に対して2つ以上の和訓を掲載することも珍しくない。結果として複数和訓のうち一つが傍訓となり、他は漢字の下に配置される字下注訓として現れる。

山田（1971）は『落葉集』の傍訓が当時の定訓（常用訓）であるとした。『落葉集』を構成する三部において繰り返し現れる同一漢字の傍訓が原則として一致しており、そのことが個々の漢字における和訓間の優先順位（例えば「小玉篇」掲載の「超」は和訓に「こゆる・ほしいまま・かろし・をどす・よぎる」を持つが、最優先の和訓「こゆる」が傍訓となる）に基づく漢字表記の実態を反映するのみならず、辞書内で漢字→和訓、和訓→漢字の双方向での検索可能性を高める工夫であるという指摘である。ここでいう検索可能性とは、部首立ての「小玉篇」の序文にもあるように、かたちの特徴から所用の漢字を求め、音訓を検索の鍵としていろは部立ての「本篇」「色葉字集」を利用することであり、それが常用訓であれば漢字辞書として実用性もあるということである。

ここで山田（1971）は傍訓が実際に当時の常用訓であることを検証していないが、キリシタン版の国字本『ぎやどぺかどる』の漢字表記が『落葉集』（特に「小玉篇」）の漢字と和訓の関係をふまえたものだったことを豊島（2002）が明らかにした。金属活字で印刷された『落葉集』がキリシタン版国字本の出版を準備するための活字見本帳だったとする見方であり、体系的なキリシタン語学の実践として強い説得力を持つ。『ぎやどぺかどる』はキリシタン版国字本を代表する文献で、キリシタン版の規範性がよく現れている文献であるから、それが当時の日本人に違和感のない漢字表記であったとすれば、『落葉集』の傍訓が当時の日本語の漢字表記の実態を反映したものであったという指摘もおおむね正しいだろう。

しかし、ここには課題が残されている。常用漢字表の音訓を参照すれば明らかなように、現代日本語の表記に必要な漢字を選抜した漢字集合には、和訓を持たない漢字が大量に含まれている。専ら漢語を表記する漢字で和訓が対応しづらい場合や、同訓異表記が優先される場合があるので、このことは漢字表記の実態をふまえれば不自然ではない。一方で『落葉集』はほとんどの漢字が一つ以上の和訓を持つので、辞書内で傍訓として扱われていても、実際には日本語の表記に用いられない漢字が相当数あることが予測できる。

定訓とは、山田（1971）によれば、

> 某一字について、その呼称を考へる時に、直ちに喚起される字訓を、先づ第一にその字の定訓（またはその一つ）に擬することが許されるであらうと考へる。
> （中略）その字を指し示すに援用できて、十分その機能がみとめられるレベルに達してゐる語を、その字の定訓といふことができよう。

ということだが、実際には、漢字→和訓の方向では最優先の和訓であっても、和訓→漢字の方向では十分な結びつきがない場合がある。『落葉集』の傍訓は当時の表記の実態をふまえたものとは言い切れない部分があるのではないか。漢字表記の体系を『落葉集』の傍訓は、個々の漢字に対する最優先の和訓を示すことと、辞書内での検索便宜上の鍵として機能することにおいて共通するが、同訓異表記の関係において、すべてが和訓→漢字の方向での漢字表記の実態をふまえたものであったかについては疑問が残るからである。本稿はそうした定訓の実態について、当時の日本人によって愛好され写本や版本が複数流通していた『太平記』を再編集したキリシタン版『太平記抜書』の漢字表記をもとに検証しようとするものである。

2. 調査の対象と方法

豊島（2002）が指摘したように、漢字整理・漢字制限としての成果を示す漢字表としてみれば、『落葉集』と常用漢字表は本質的に同じものである。相違点は、ほぼすべての漢字に何らかの和訓を掲載する『落葉集』に対し、常用漢字表は最小限の和訓に限定したという点である。そのため、常用漢字表の和訓を定訓とみるのは全く問題ないが、『落葉集』については漢字表記の実態にそぐわない面が出てくるというのが本稿の主張である。

そのことを検証するため、本稿では『太平記抜書』を取り上げた。天理図書館が所蔵する天下の孤本『太平記抜書』はキリシタン版でありながら、日本側の『太平記』のダイジェスト版として、宗教的文脈を除外するなどして再編集した本文を持つ。直接の原典は不明ながら、慶長8年古活字版が最も有力であることが高橋（1962）、原田（1976）によって指摘され、複製本の解説者である大塚（1978）

や、『太平記抜書』注釈本の編者である高祖（2007）もそれを踏襲している。漢字表記についてもおおむね慶長8年古活字版に基づくとみられるが、漢字表記には傍訓がないため和訓を比較することができない。

そして、『太平記抜書』の用例は当時の漢字表記の平均的水準そのものではない。むしろ、中世の軍記物語として文体や内容に大幅な偏りがあることには注意すべきである。そのため用例が少ない漢字や和訓を常用性が低いと即断することはできないが、異なる文脈で同一漢字や和訓が多く現れるのであれば、常用性が高いと判断する根拠になるだろう。つまり用例数だけで判断するのではなく文脈の理解をふまえたうえで、『太平記抜書』に現れた和訓についての比較を行うことは可能だろう。

そのため本稿では高祖（2007, 2008, 2009）による注釈書を参考としつつ原文の読解にあたり、正確な和訓を想定する作業をとおして調査の信頼性を高める努力をした。結果として、一部の和訓には曖昧な点も残ったが、おおむね問題のない水準で『太平記抜書』に現れる漢字と和訓の関係をデータベース化することができた。『落葉集』との比較は、白井が公開した『落葉集』の漢字・和訓データを利用した。

また、和訓の比較にあたって、仮名遣いの相違、活用の相違、動詞の自他の相違、品詞の相違、歴史的な変化による語形の相違（あらた→あたら）などはすべて同一とみなし、語形は「小玉篇」掲載の語形を優先しつつ漢字を新字体で示した。「網（あみ）」と「編（あむ）」のような連用形が名詞化した語には書き分けている例もあるようだが、すべて一律に扱うこととした。

3. 調査結果と考察

3.1　全体的な傾向

「小玉篇」掲載の漢字と和訓について、『太平記抜書』と比較した結果を表1に示す。

表1

漢字一致				漢字不一致
傍訓一致	傍訓不一致		和訓なし	
	字下注訓一致	字下注訓不一致		
①1269	②72	③501	④15	⑤209

表1に示すように、全体では2,066字が比較対象となった。以下、①傍訓一致から順に典型的な例をあげて検討する。

3.2.1　①傍訓が一致する漢字

①定訓が『太平記抜書』に現れた漢字が1,269例あり、このなかには字下注訓も含めて二つ以上の和訓が『太平記抜書』に現れた例も含まれる。用例数の多寡も考慮すべきだが、これらの例は『落葉集』の傍訓が定訓として当時の文献の実態を反

映したものであったことを示す例だと考えておく。少なくとも、文献に使用されない特異な和訓が傍訓であったとみるべきではないだろう。また、「断」は傍訓「たつ」、字下注訓「ことはる」「たゆる」で、『太平記抜書』にすべての和訓が現れており、「小玉篇」の和訓が実際の漢字表記によく用いられた例である。

同訓異表記については、「宣」の傍訓「のたまふ」は『太平記抜書』に多くみられるが、字下注訓「あきらか」「いはく」「あらはす」はそれぞれ同訓異表記があって優先的に対応しており、和訓で読む場合は傍訓に集約される。『太平記抜書』が一訓一字で漢字表記を統一するわけではないが、漢字と和訓の関係は表記体系の問題であり、単独の漢字と和訓の関係からのみ決まるわけではない。

3.2.2　②字下注訓のみ一致する漢字

②傍訓では一致せず字下注訓のみが一致した例が72字あり、これらは定訓認定のずれもあったことを予想させる。

例えば「事」は傍訓「つかふまつる」、字下注訓「こと・つかふ」で、『太平記抜書』では「こと」が圧倒的に多いので、傍訓は「こと」が適当だったとみられる。「縮」は傍訓「しじら」、字下注訓「つづむ・ちぢみ」だが、『太平記抜書』では「ちぢむ・しむ」で傍訓は対応しない。「相」も傍訓「かたち」、字下注訓「たすく・あひ」だが、『太平記抜書』では「あひ」が対応する。「たすく」は次節で紹介するように「小玉篇」で最大の同訓異表記をもつ語であるため、「相」で表記する必然性に乏しい。

ここまでは「小玉篇」の和訓が『太平記抜書』に現れた例である。

3.2.3　③和訓がすべて一致しない漢字

③和訓が全く一致しない例が502字は、漢字は共通しながら和訓が食い違う例である。一見すると多いようだが、ここには用例数が僅少の漢字や、もともと和訓では読まない漢字が相当数含まれることに注意する必要がある。そのため比較の際には各用例にあたって読みを確定する作業が不可欠で、それをふまえて『太平記抜書』に「小玉篇」にみられない和訓が現れた例に注目すべきである。

例えば「察」は「小玉篇」傍訓が「あきらか」で、字下注訓に「みる・さとす・あらはす・しる」を持つが、『太平記抜書』では「按察」2例、「密察・高察・叡察」が各1例あるのみで、和訓では読まない。その理由は、『太平記抜書』の「あきらか」は同訓異表記の「明」で表記することが多いため、あえて「察」で表記する必要がなかったためだろう。字下注訓「さとる・あらはす・しる」についても、「悟」「顕」「知」のような常用性の高い漢字表記があるため、あえて「察」を用いる必要がない。「察」に対する最優先和訓は「あきらか」かもしれないが、それが「あきらか」の表記に用いられないのは、同訓異表記間の優先性の問題である。

「特」は傍訓「ことに」、字下注訓「さかり・ひとり・こというし・いつくし」だが、『太平記抜書』では全く和訓に対応しない。

また、表2に例を示すように、『太平記抜書』だけにみられる和訓も少なくない。これら以外は用例が少ないか、漢語の表記に用いるかなので、『太平記抜書』の和訓が全く『落葉集』に現れない事態は、500字という数字から想像するほど多くない。

表2

	太平記抜書	落葉集 傍訓	落葉集 字下注訓
綺	いろふ	うすもの	こと のろふ
戌	いぬ	つちのへ	
係	かける	つぐ	つらなる
体	すがた	かたち	
揆	おもむき	はかる	
議	たばかる	はかる	ならふ
句	かがまる	まがる	
胡	ゑびら	ゑびす	なんぞ
寿	ことぶき	いのち	いのちながし
混	ひたすら	まじはる	
挫	おす	とりひしぐ	くだく
粧	よそほふ	かざる	
荘	かざる	おごそか	いつくし
怠	たゆむ	おこたる	ゆるし ゆるかせ ものうし
尊	みこと	たつとし	あがむ まさし
賜	たまはる たまふ	たまもの	ほどこす めぐむ
兆	しるし	うらかた	
転	ころぶ （まろぶ）	くる	うたた はこぶ めぐる
鄙	ひな	ゐなか	あやし いやし
婦	つま	め	
太	ふとし ひたすら	はなはだ	
辺	あたり	ほとり	おほし かたはら

	太平記抜書	落葉集 傍訓	落葉集 字下注訓
貶	おとす	そしる	いたる しりぞく ほどこす
模	うつす	さぐる	いかた
炎	ほのほ	あつし	ほとほり
将	はた	まさに	たすく ひきゆ
幻	うつつ	まぼろし	
務	つかさ	まつりごと	しげし つとむ
裳	も	もすそ	
最	いと	もつとも	あつむ
予	われ	たのしむ	よろこぶ
要	よこぎる よこたふ	もつぱら もとむ	かならず もつとも
浴	あびる	ゆあぶる	
炉	いろり	やく	
屑	くづ	すりくづ	とりへ いたづがはし ものゝかず
薫	にほひ	かほる	ふすぶる かうばしし たきもの こがるる
岨	けはし	さがし	
猪	い	いのしし	
頓	やがて	にはか	
嚢	つつむ	ふくろ	
哢	もてあそぶ	あざける	
肆	かるがゆゑ	ほしいまま	

「粧（よそおふ）」「頓（やがて）」などは『太平記抜書』に10例以上あり、「小玉篇」に掲載があってもおかしくはない。

「小玉篇」の字下注訓には、『太平記抜書』の漢字表記と比較して不足する場合と、過剰な場合がある。また「単」の字下注訓「すすしのきぬ・ふたごころなし」

は和訓というより語釈に近く、こうした和訓が「小玉篇」の字下注訓に現れることにも注意する必要がある。

3.2.4　④「小玉篇」に和訓がない漢字

漢字は一致するものの、④「小玉篇」で和訓を持たない例がある。「箇尺丈髄寸杷琶枇琵帽硫麟碗艘麒」の15字でかなり少ないが、和訓を想定しづらい漢字であるため、『太平記抜書』でも漢語に用いられるのみである。

実態としてはこれに類する漢字が多くあり、和訓を想定しづらいにもかかわらず「小玉篇」で傍訓が与えられている。そこに『落葉集』の特徴をみるべきだろう。

3.2.5　⑤「小玉篇」のみにみられる漢字

⑤「小玉篇」掲載の漢字が『太平記抜書』に掲載されない例は209字ある。常用性の高い漢字を掲載したと思われる『落葉集』が、一部にそうした方向性に反する漢字を含むことを予想させる特徴である。

ここからみれば、漢字辞書として『落葉集』は『太平記抜書』よりも多くの漢字を掲載するようにみえるが、実態はそうではない。『太平記抜書』は『落葉集』の1.5倍程度の異なり漢字を含んでおり、全体としては『太平記抜書』の漢字が『落葉集』に掲載されないことが多い。

キリシタン版国字本の各文献と『落葉集』との使用漢字の比較は白井（2022）に詳述したが、和訓から改めて観察すると、以下の例では『太平記抜書』に用例が複数みられる和訓対応の漢字が「小玉篇」に欠落している。

朝　あさ	面　おもて	籠　こもる	適　たまたま
侮　あなどる	疎　おろそか	怺　こらへる	民　たみ
豈　あに	輝　かがやく	捜　さがす	鼓　つづみ
遭　あふ	篝　かがり	昌　さかん	裹　つつむ
呈　あらはす	飾　かざる	醒　さめる	翅　つばさ
忿　いかる	飼　かふ	併　しかしながら	坪　つぼ
怒　いかる	鏑　かぶら	符　しるし	咎　とが
吻　いきづく	餉　かれいひ	杉　すぎ	駐　とどむ
諫　いさむ	鋒　きつさき	透　すく	弔　とぶらふ
雖　いへども	叢　くさむら	瀬　せ	訪　とぶらふ
顰　いやし	摧　くだく	側　そば・あたり	扉　とぼそ
伺　うかがふ	組　くみ	峙　そばだつ	執　とる
奪　うばふ	比　くらべる・ころ	副　そふ	仲　なか
戎　えびす	茲　ここ	杣　そま	長　ながし
措　おく	爰　ここ	瀧　たき	媒　なかだち
贈　おくる	拵　こしらふ	敲　たたく	半　なかば
懼　おそる	恋　こひ	憑　たのむ	乍　ながら

並　なみ	呑　のむ	履　ふむ・くつ	揉　もむ
双　ならぶ	測　はかる	麓　ふもと	鏃　やじり
也　なり・また	筈　はず	亡　ほろぼす	夢　ゆめ
匂　にほひ	畑　はた	琢　みがく	冑　よろひ・かぶと
濡　ぬれる	憚　はばかる	充　みちる	跳　をどる
臨　のぞむ	這　はふ	召　めす	
展　のぶ	潜　ひそか	藻　も	
登　のぼる	踏　ふむ	髻　もとどり	

これらのうち「忿・憚・副・亡・夢・比・登」などは『太平記抜書』に多く現れており、「小玉篇」に掲載があってもおかしくない漢字だが、同訓異表記が「小玉篇」にみられることも多いので、『落葉集』における同訓異字整理の結果とみることもできる。

3.3　同訓異表記からみた『落葉集』の特徴

『落葉集』の漢字と和訓の関係には同訓異表記が多く、「小玉篇」では対象とした2,066字のうち385組1,018字が同訓異表記の関係にある。このなかには意義により書き分けられる例もあるようだが、同訓異表記間の優先性によって『太平記抜書』の漢字表記に現れなかったと思しき例が少なくない。

『落葉集』と同じいろは部立ての『色葉字類抄』（平安時代（院政期）成立）でも同一和訓に対応する漢字を列挙しているが、排列の先頭にある漢字の常用性が高く、当該和訓と強く結びつく漢字表記であることを峰岸（1984）が指摘している。

扶タスク助高祐資輔淏佐相擁維佑佛将淳右持扇庇漾毗介仍弼朋杖賛捋飭烝裨並悲雍脚抄遥濟伏枝忧傳已上扶也　（黒川本　巻中3ウ2）

この例では大量の同訓異表記が掲載されるものの、「扶」が「たすく」に対応する最優先の漢字表記であることが示される。

一方で『落葉集』に含まれる「色葉字集」では和訓に対応する漢字が部首によっておおまかにまとまっているため、同一和訓をもつ漢字が一つの部内において散在することになり、漢字相互の優先性は読み取れない。「たすく」が「た」部において、「佐」（7ウ2）、「扶」（7ウ4）、「菩」（7ウ4）、「衛」（7ウ7）、「輔」（8オ2）、「助」（8オ2）のように分散するのは、「色葉字集」が各部内の漢字を人偏→（口偏）→手偏のようにおおむね部首順で並べて掲載するからである。「小玉篇」では「佑・弼・菩・介・亮」の5字が追加されるが、部首立てであるため人篇ほか各部に配属され、当然ながら同訓異表記間の優先性は示されない。

『太平記抜書』では「助・扶」を用い、その他の同訓異表記は現れない（以下の用例には句読点・濁点を補い、下線を付し、一部を読み下した）。

是も猶、万民の飢を助くべきに非ずとて　　1巻3オ10
時々馬の足を休め、兵の機を扶て敵を付は　　2巻38ウ6

『落葉集』は同訓異表記の序列に無頓着である。当時の漢字表記において同訓異表記のすべてを用いるとは思いにくいので、『落葉集』傍訓は漢字表記の実態をそのまま反映したとは言いがたい面があると予想される。以下ではこのことを、『太平記抜書』の漢字表記との比較によって検証する。

3.4 同訓異表記の分析

同訓異表記を比較するにあたっては原則として語根で判断したが、「厚」と「暑・熱」のように明確に語義が異なるものは区別した。

以下の表3は、このような方針で「小玉篇」の同訓異表記を『太平記抜書』と比較し、一致・不一致（用例の有無）を分類したものである。

表3

ID	傍訓	一致	不一致
A1	あし	脚足	
A2	あやまる	誤謬	
A3	あらず	非不	
A4	あらたむ	新改	
A5	あらふ	洗濯	
A6	いだく	懐抱	
A7	いただく	頂戴	
A8	いやし	賤卑	
A9	うくる	受請	
A10	うごく	動揺	
A11	うら	浦裏	
A12	うるふ	閏潤	
A13	おこす	興発	
A14	かうむる	蒙被	
A15	かかやく	輝曜	
A16	かしこし	賢畏	
A17	かすかなり	幽霞	
A18	かは	河川	
A19	かはく	渇燥	
A20	きも	肝胆	
A21	きゆる	消滅	
A22	くもる	雲曇	
A23	くるる	晩暮	
A24	こころ	意心	
A25	こし	腰輿	
A26	こゆる	越超	
A27	さと	里郷	
A28	さらす	曝暴	
A29	すがた	姿質	
A30	すすむ	勧進	

ID	傍訓	一致	不一致
A31	すなはち	則即	
A32	すみ	炭墨	
A33	すむ	住栖	
A34	する	磨摩	
A35	せまる	迫逼	
A36	たけし	武猛	
A37	ただ	只唯	
A38	たたかふ	闘戦	
A39	たつ	辰竜	
A40	たつ	立建	
A41	たてまつる	献奉	
A42	たに	渓谷	
A43	つく	衝突	
A44	つく	築筑	
A45	つくる	作造	
A46	ところ	処所	
A47	ともしび	燭灯	
A48	とら	虎寅	
A49	なを	尚猶	
A50	ぬすむ	盗偸	
A51	ねたむ	嫉妬	
A52	ねむる	睡眠	
A53	のこる	遺残	
A54	はた	旗幡	
A55	はぢ	辱恥	
A56	ひとし	均等	
A57	ふす	臥伏	
A58	ふるふ	振震	
A59	ほこ	鉾戈	
A60	むね	旨宗	

ID	傍訓	一致	不一致
A61	むま	午馬	
A62	ものうし	懶堕	
A63	や	箭矢	
A64	やぐら	櫓楼	
A65	ゆるす	赦免	
A66	よ	世代	
A67	よし	義由	
A68	よぶ	喚呼	
A69	よむ	読誦	
A70	よる	夜宵	
A71	わく	沸涌	
A72	わづか	僅纔	
A73	われ	我吾	
A74	をそる	恐怖	
A75	をどる	躍踊	
A76	をる	折織	
A77	かくる	舁掛懸	
A78	かはる	易替変	
A79	きはまる	窮極究	
A80	ことば	言詞辞	
A81	たとふ	縦喩譬	
A82	なく	泣鳴啼	
A83	むかふ	迎向対	
A84	もと	許元本	
B1	あがむ	崇	欽
B2	あきらか	明	察
B3	あざける	嘲	哢
B4	あしし	悪	凶
B5	あそぶ	遊	游
B6	あた	仇	冦
B7	あつし	厚	淳
B8	あらし	荒	麁
B9	あらそふ	諍	論
B10	いき	息	気
B11	いくさ	軍	陳
B12	いさぎよし	潔	皎
B13	いさご	沙	砂
B14	いし	石	磁
B15	いとけなし	幼	稚
B16	いぬ	犬	戌
B17	いのち	命	寿
B18	いやす	愈	療
B19	いろどる	彩	宋
B20	うかがふ	窺	候
B21	うやまふ	敬	礼
B22	うらむ	恨	怨
B23	おか	岡	丘
B24	おきな	翁	耆
B25	おこたる	懈	怠
B26	おごる	驕	嬌
B27	おさふ	押	抑

ID	傍訓	一致	不一致
B28	おしゆ	教	訓
B29	おほす	課	駄
B30	かき	垣	堵
B31	かは	皮	革
B32	かばね	尸	骸
B33	かへりみる	顧	省
B34	かみ	紙	箋
B35	かり	雁	厂
B36	かり	狩	猟
B37	かりに	仮	権
B38	きく	聞	聴
B39	きぬ	絹	繻
B40	くだく	砕	研
B41	くに	国	州
B42	くはし	委	精
B43	くらゐ	位	爵
B44	くろし	黒	緇
B45	け	毛	毫
B46	けがる	汚	穢
B47	けだもの	獣	畜
B48	こたふ	答	応
B49	ことごとく	悉	咸
B50	ことなる	異	奇
B51	ことに	殊	特
B52	ことはり	理	判
B53	こめ	米	穀
B54	こらす	凝	懲
B55	ころす	殺	害
B56	さかんなり	盛	熾
B57	さぐる	探	模
B58	さす	差	刺
B59	さだむ	定	決
B60	さはり	障	碍
B61	しげし	繁	昌
B62	しとね	茵	蓐
B63	しな	品	級
B64	しのぐ	凌	贔
B65	しばらく	暫	臾
B66	しりぞく	退	屏
B67	しる	知	識
B68	すくふ	救	済
B69	たかし	高	堂
B70	たぐひ	類	眷
B71	たくむ	巧	工
B72	たつとし	貴	尊
B73	たのむ	頼	怙
B74	ちまた	岐	坊
B75	ちり	塵	埃
B76	つかまつる	仕	事
B77	つたふ	伝	訳
B78	つち	地	土

ID	傍訓	一致	不一致
B79	つつしむ	謹	祇
B80	つとむ	勤	役
B81	つはもの	兵	殳
B82	とき	時	期
B83	とどまる	留	逗
B84	とふ	問	訊
B85	どろ	泥	淤
B86	とをる	通	徹
B87	なかれ	勿	莫
B88	にたり	似	肖
B89	には	庭	場
B90	ねる	練	煉
B91	のき	軒	檐
B92	のごふ	拭	巾
B93	のる	乗	騎
B94	はる	張	幕
B95	ひ	日	陽
B96	ひそか	密	秘
B97	ひつき	棺	榴
B98	ひめ	姫	妃
B99	ふかし	深	浡
B100	ふくろ	袋	嚢
B101	ふせぐ	防	扞
B102	ふで	筆	翰
B103	ほし	星	斗
B104	まいなひ	賄	賂
B105	まうす	申	奏
B106	まがる	曲	句
B107	ますます	益	倍
B108	まつりごと	政	務
B109	みかど	帝	廷
B110	みどり	緑	翠
B111	むね	胸	臆
B112	むまや	厩	駅
B113	むまるる	生	誕
B114	もつとも	尤	最
B115	もとむ	求	索
B116	もよほす	催	促
B117	やく	焼	炉
B118	やしろ	社	廟
B119	やなぎ	柳	楊
B120	やぶる	破	敗
B121	ゆづる	譲	禅
B122	よみがへる	活	蘇
B123	ゐる	居	坐
B124	をに	鬼	魔
B125	をばしま	檻	欄
B126	をろか	愚	痴
B127	あをし	青	蒼滄
B128	いきどほり	憤	悶鬱
B129	いのる	祈	呪祷

ID	傍訓	一致	不一致
B130	おしむ	惜	吝慳
B131	おほひなり	大	洪俣
B132	かがまる	屈	勾蟄
B133	かず	数	員億
B134	かたる	語	談話
B135	かほ	貌	妍娟
B136	かんがふ	勘	稽検
B137	き	木	材樹
B138	きびし	稠	厳緊
B139	くむ	汲	酌斟
B140	こころざし	志	塔詩
B141	こゑ	声	韻糞
B142	さかづき	盃	觴盞
B143	しづむ	沈	没淪
B144	しるし	験	証瑞
B145	すこし	些	少微
B146	そなふ	備	貢膳
B147	とし	敏	駿迅
B148	ともがら	輩	党倫
B149	な	名	号銘
B150	にはか	俄	頓勹
B151	ねんごろ	懇	慇懃
B152	のぶる	述	演臚
B153	はなはだ	甚	困太
B154	ひつさぐ	提	擘挈
B155	ひとへ	偏	旬単
B156	ふむ	踏	蹂躙
B157	ほしいまま	恣	逸肆
B158	まく	巻	軸蒔
B159	まさし	正	雅将
B160	まもる	守	護擁
B161	やまひ	病	疝疒
B162	あらはす	顕	詮状現
B163	いへ	家	舎郭广
B164	えだ	枝	条肢枚
B165	おとこ	男	伊士俗
B166	たのしむ	楽	喜娯予
B167	ふだ	札	簡冊篇
B168	もつぱら	専	壱純要
B169	やはらぐ	和	雍柔軟
B170	よろこぶ	悦	歓欣慶
B171	はかる	量	斤秤斛料
B172	やつこ	奴	臣婢奴僮
B173	しるす	注	紀記題点録
B174	ひろし	広	碩博頌宏弘
B175	のり	範	度規儀刑憲式法律
B176	あかし	朱赤	丹
B177	あつし	暑熱	炎
B178	あつむ	集聚	府
B179	あひだ	間際	頃
B180	あまねし	普遍	周

ID	傍訓	一致	不一致
B181	あむ	網編	网
B182	あめ	雨天	宇
B183	ある	在有	存
B184	いかる	嗔恚	瞋
B185	いたる	至到	達
B186	うつたふ	訟訴	讒
B187	うつる	移遷	徒
B188	えらぶ	撰選	択
B189	おつる	落墜	零
B190	おもふ	思想	念
B191	かうばし	香芳	芬
B192	かがみ	鑑鏡	監
B193	かく	欠闕	虧
B194	かげ	陰影	景
B195	かさぬ	重累	功
B196	かしら	首頭	頁
B197	かたし	堅難	固
B198	きみ	君公	卿
B199	きよし	浄清	廉
B200	くら	倉蔵	庫
B201	これ	是之	惟
B202	すぶる	惣総	部
B203	たつ	裁断	製
B204	つらなる	列連	伍
B205	とし	歳年	季
B206	とり	鳥酉	禽
B207	なみ	波浪	瀾
B208	はし	橋梯	橙
B209	はじめ	始初	孟
B210	ひと	人者	他
B211	まこと	実真	信
B212	みやこ	京都	洛
B213	むくふ	酬報	謝
B214	もろもろ	師諸	衆
B215	やすし	安泰	宴
B216	わかつ	分別	僉
B217	わざはい	禍災	殃
B218	をはり	終畢	竟
B219	いたむ	痛傷	感惻
B220	うたふ	歌謳	諷唄
B221	さかい	境堺	界域
B222	さとる	覚悟	叡了
B223	たから	財宝	資貨
B224	とく	解説	講釈
B225	はしる	走馳	駆疋
B226	まじはる	交雑	錯混
B227	みる	看見	観覧
B228	おほふ	蓋覆	冖冃
B229	きる	切截	伐戮剪
B230	くらし	暗闇	昧冥瞑
B231	さいはい	祐幸	徳福祥

ID	傍訓	一致	不一致
B232	そしる	毀謗	誹貶訕
B233	つかさ	官司	史典尹
B234	つね	経常	毎庸恒
B235	めぐる	廻遶	巡旋囗
B236	かたち	形容	相象像体
B237	たま	玉珠	璃瑠珞珱
B238	しづか	閑静	梵謐寥寂寞
B239	たすく	助扶	佐亮衛介弼輔菩佑
B240	あはれむ	哀憐愍	慈
B241	いましむ	戒禁誡	警
B242	かへる	還帰返	反
B243	せむる	攻責譴	剋
B244	つぐ	継嗣翌	係
B245	とも	供共友	朋
B246	ひらく	開啓披	闢
B247	みち	途道路	術
B248	したがふ	従順随	逐孝
B249	はかりこと	計策謀	略籌
B250	よし	吉善能	賀佳
B251	とる	採取捕	掬接拈批
B252	よる	依因寄	縁拠籍倚
B253	あふ	逢会遇合	値
B254	おさむ	治修納収	税
B255	うつ	撃打討撲	擲拷誅
B256	つく	就属着付	託附托
C1	あに		兄昆
C2	あふち		栴檀
C3	あまし		甘蜜
C4	うむ		倦熟
C5	うれふ		惆悵
C6	おごそか		荘儼
C7	おんどり		鳳雄
C8	かまびすし		嘩喧
C9	からし		芥辛
C10	きる		服段
C11	くさかり		芻蕘
C12	さがし		嶮岨
C13	さとす		慧智
C14	ただしし		忠嫡
C15	ただす		督糾
C16	たちまはる		徊徘
C17	たまのきず		瑕瑾
C18	つくゑ		案卓
C19	つづれ		縷褐
C20	つまびらか		審詳
C21	とつぐ		嫁婚
C22	とどむ		按制
C23	なへ		苗裔
C24	のる		罵詈
C25	はげむ		励勲
C26	はらむ		妊胎

ID	傍訓	一致	不一致
C27	ひも		綸紕
C28	ほむる		讃褒
C29	まれびと		客賓
C30	みことのり		詔勅
C31	みみしい		聾聵
C32	みやびやか		妖夭
C33	めぐみ		恩恵
C34	やくびやう		疫癘
C35	わざ		芸才
C36	ゑびす		胡蛮

ID	傍訓	一致	不一致
C37	をし		唖瘖
C38	をぢ		叔伯
C39	いつくしむ		寵愛仁
C40	うすもの		紗羅綺
C41	たまもの		賜禄俸
C42	つかさどる		宰職領
C43	ゆく		往征逝
C44	はかる		評議図揆
C45	みだりなり		妄濫淫乱

内訳は、A.複数の同訓異表記のすべてが一致した84例、B.一致と不一致があった256例、C.すべてが一致しなかった45例である。以下の各漢字について、一致「○」、不一致「×」で示した。

Aは2〜3字の同訓異表記から構成されており、A78かはる（○易・替・変）、A80ことば（○言・詞・辞）、A84もと（○許・元・本）などは3字の同訓異表記をもつ。これらの同訓異表記には、『太平記抜書』において意義によって書き分けられた例と、同義でありながら表記のゆれを生じた例があるようだが、『太平記抜書』が一訓一字の方針を持っていたとは言えないことが分かる。

半年計、出仕を止め、山臥の形に身を易て大和河内に行て　　1巻6ウ3
今夜は常の寝所を替て、何くに有とも見えす　　1巻25オ6
是も幾程の夢ならん、移り変る世の在様、今更驚かるるも理也　　2巻37ウ2

Bは2〜10字の同訓異表記から構成されており、先ほど例を挙げたB239たすく（○助・扶／×佐・亮・衛・介・弼・輔・菩・佑）の他に、B238しづか（○閑・静／×梵・謐・寥・寂・寞）、B236かたち（○形・容／×相・象・像・体）、B175のり（○範／×度・規・儀・刑・憲・式・法・律）、B166たのしむ（○楽／×喜・娯・予）、B170よろこぶ（○悦／×歓・欣・慶）などは不一致の同訓異表記が多く、『太平記抜書』では漢字表記が絞り込まれている。逆に、B253あふ（○逢・会・遇・合／×値）、B240あはれむ（○哀・憐・愍／×慈）、B241いましむ（○戒・禁・誡／×警）などは一致の同訓異表記が多く、『太平記抜書』での漢字表記の絞り込みはみられない。

今は我身の上になり、哀やいとど増りけん　　1巻20オ10
彼帝は随分憐民（民をあはれみ）治世給ひしだに地獄に落給ふ　　5巻37ウ1
帝は寒夜に御衣をぬがれ、民の苦を愍み給ひしだに、正く地獄に落給ひけるを　　5巻36オ9

また、B59さだむ（○定／×決）を傍訓にもつ「決」には字下注訓「ひらく・かならず」もあるが『太平記抜書』は和訓で全く読まない。「ひらく」を字下注訓にもつ「開・啓・披」、「かならず」を傍訓にもつ「必」があり、それらが優先されたためだろう。

このように、漢字と和訓の関係をふまえた表記の実態は複雑だが、全体としては一致358例、不一致385例とおおむね拮抗している。

Cは同訓異表記の関係にある『落葉集』傍訓が『太平記抜書』に全く現れない例である。これらは字音で読み漢語として用いた例が多く、例えばC2あふち（×栴・檀）、C24のる（×罵・詈）、C33めぐみ（×恩・恵）などは漢語として『太平記抜書』に用例がある。

梅檀の林に入者は不染衣　　2巻42ウ13
罵詈誹謗する人をも不咎　　6巻20オ8
君臣和睦の恩恵を被施候は　　5巻8ウ11

「小玉篇」玉部「玉瑠璃珱珞瑕瑾環現理珠珍瑞琵琶琴」の各字のうち「琵・琶」には傍訓がない。「瑠・璃・珱・珞」は「たま」、「瑕・瑾」は「たまのきず」の傍訓を持ち、これらは個々の漢字において最優先の和訓だったかもしれないが、「たま」の漢字表記としては使いにくい漢字だったのだろう。したがって、『太平記抜書』の実態に照らせば、山田（1971）がいうような「「たま」といふ字」という情報のみでは「玉・珠」がまず想起され、同訓異表記である「瑠璃珱珞」の各字を思い浮かべることは難しい。

4. まとめ

『太平記抜書』にみられる漢字と和訓の関係の多くは『落葉集』傍訓に一致しており、定訓とみなしても差し支えない。傍訓で一致しない和訓が字下注訓で一致することもあるが、和訓の優先性の問題があっただろう。『太平記抜書』での漢字と和訓の関係の一部は『落葉集』傍訓・字下注訓に全く一致しないが、それほど多いとはいえない。

注意すべきは、『落葉集』傍訓は個々の漢字内での和訓の相対的な優先性によって最上位となった和訓であるという点である。そのため、同訓異表記をもつ漢字においてそれらの半数が『太平記抜書』に現れていないように、漢字表記の実態とは乖離した例が多くみられる。また、そもそも和訓で読みにくい漢字に強制的に傍訓を挙げた例も多く、それらは当然ながら和訓に対応する漢字表記に用いられることがない。この問題は『落葉集』が二千字水準の常用性の高い漢字を選抜した漢字辞書であるという点でいくらか軽減される（概して常用性が高い漢字は何らかの和訓

を持つ）としても、和語（和訓）から適切な漢字表記を知るための辞書としては欠陥ともなる。

「小玉篇」で和訓をもたない漢字に「箇柑捌尺丈髄寸噌杷琶枇琵帽硫麟碗埒彡腑艘裲麒駅」があり、これらは『太平記抜書』においても和訓に対応することがない。『落葉集』傍訓には和訓を表記するための漢字という観点からみて定訓とは言いがたい漢字が含まれているので、それらはここで挙げた和訓を持たない漢字に類するものとして、和訓を持たない掲出（または傍訓を持たない掲出）を選ぶ方法もあった。それをしなかったのは、『落葉集』を校正する三部間での和訓を鍵とした連携が必要だったからである。つまり、当代にみられない斬新な形式の辞書を編集したことによる代償である。

『落葉集』を個々の漢字に対して和訓を挙げた漢和辞書とみるか、和語（和訓）に対応する漢字表記を挙げた国語辞書（語彙辞書）とみるかで評価は異なるが、「小玉篇」は相対的に最優先の和訓を傍訓として位置づけた点に特徴があるとしても基本的に漢和辞典である。そして「小玉篇」掲載漢字の大部分を共有する「色葉字集」は、それらの漢字と和訓の関係を逆転させた和訓と漢字の関係を示すもので、当代の漢字表記の実態のみを反映する辞書ではない。「色葉字集」掲載漢字が部首でゆるやかにまとまっているのも、編集に先立って漢字辞書から漢字と和訓を採取したためだろう。『色葉字類抄』のように同訓異表記が一箇所にまとまっていないのも、このことを裏付けている。

日本語史の観点からみれば、『落葉集』傍訓を中世日本語の漢字表記を反映した定訓とみることは大筋において誤ってはいないが、本稿で指摘した諸特徴をふまえて理解すべきである。

参考文献

大塚光信（1978）「解題」天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（1978）所収
高祖敏明（2007, 2008, 2009）『キリシタン版　太平記抜書　一・二・三』教文館
白井純（2021）「辞書と文献の比較に基づく定訓論の再検討―キリシタン版『落葉集』と『ぎやどぺかどる』を中心として」加藤重広・岡墻裕剛編『日本語文字論の挑戦』、pp.152-174
白井純（2022）「キリシタン版『落葉集』所収漢字と和訓の常用性」『訓点語と訓点資料』148、pp.69-86
高橋貞一（1962）「キリシタン版太平記抜書」『京都市立西京高等学校研究紀要　人文科学』9号、pp.45-66
天理図書館善本叢書和書之部編集委員会（1978）『天理図書館善本叢書　きりしたん版集　二』八木書店
豊島正之（2002）「キリシタン文献の漢字整理について」『国語と国文学』79

(11)、pp.47-59
原田福次（1976）「キリシタン版『太平記抜書』の底本について」野田寿雄教授退官記念論文集刊行会編『日本文学新見―研究と資料―』笠間書院
峰岸明（1984）「平安時代における漢字の定訓について」『国語と国文学』61、pp.44-60
山田俊雄（1971）「漢字の定訓についての試論―キリシタン版落葉集小玉篇を資料として」『成城国文学論集』4、pp.1-256

備考

本稿は、共著者である陳朝陽が令和5年度修士論文として広島大学に提出した内容を、指導教員である白井による独自の調査結果を加味して全面的に改稿したものである。修士論文には多訓字の分析も含まれていたが、本稿では割愛した。

本稿で用いた『落葉集』のデータは、白井が運営する「広島大学日本語研究会」のホームページ（https://home.hiroshima-u.ac.jp/jshira/kojisyo.html）で公開中である。

本研究はJSPS科研費 JP23K00552の助成を受けたものである。

（しらい　じゅん、広島大学大学院人間社会科学研究科教授）
（ちん　ちょうよう、広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程前期）

On the Representative Wakun of Kanji in *Rakuyōsyū*: Groups of Kanji Having the Same Wakun

Jun SHIRAI
Zhaoyang CHEN

Key Words: Jesuit Mission Press in Japan, Kanji Dictionary, Wakun of Kanji, Common Readings of Kanji, Homophones

This paper examines the wakun (Japanese kanji readings) in the Kanji dictionary *Rakuyōsyū* (published by the Jesuit Mission in Japan, 1598), in comparison with *Taiheiki Nukigaki* (1612–13?).

The representative wakun of *Rakuyōsyū* for each kanji are in fact only relatively high-ranking wakun, as there are many examples of deviations from the actual writing.

Many kanji that are difficult to read by wakun have representative wakun that are common to more than one kanji. In such cases, a more appropriate kanji was selected for actual writing. Therefore, it is not surprising that these impractical pairs of kanji and wakun did not appear in the *Taiheiki Nukigaki*.

Although it is not incorrect to regard the representative wakun of *Rakuyōsyū* as a set of very frequently used wakun that reflects medieval Japanese kanji writing, due attention to the issues pointed out in this paper is needed when it is used as a Japanese language resource.